

登山月報



マモストーン・カンリ (7,526m)



I F S C主催スピードクライミングイベント参加報告	2
C A S 審問について	3
第142回 Mountain World	4
新連載 Enjoy Climbing	5
J M S C A、寄贈図書	6
第17回山岳遭難事故調査報告書(1)	7
コロナ禍の中で、その後で(その1)	12
スポーツ団体ガバナンスコード(2)	13
表紙のことば、編集後記	14

IFSC主催スピードクライミングイベント参加報告

<はじめに>

日本時間8月3日(月)0時より、「IFSC Connected Speed Knockout」と名付けられたスピードクライミングの国際バーチャルイベントを、国際スポーツクライミング連盟(以下、IFSC)が動画配信した。

新型コロナウイルスの影響から、3月以降のすべての国際大会(大陸別オリンピック予選会、2020シーズンワールドカップなど)が延期や中止される中、世界各国の選手が一箇所に集合することなく国際大会を開催しようという意図からIFSCが考案した新しい形式のイベントであった。リードやボルダリングでは世界各国で同一条件を作ることは極めて難しい。しかしながら、スピードクライミングならば、クライミング壁、ホールド、オートビレイ機、計時システムなど、統一された規格の設備・備品を使用して実施される競技であることから、屋内外、気候の違いなどはあるものの、世界各国でほぼ同一条件での競技を設定できる。そこで、世界各国で撮影されたスピードクライミング競技の動画を、一つのスピードクライミング国際大会が開催されたように編集し、その動画を配信したイベントであった。

本稿では、IFSC初の試みである本イベントについて、スポーツクライミング部理事と日本代表チームのスピードクライミングコーチの両者の立場から簡単に報告させていただく。

<出場国・選手>

本イベントには、イタリア、インドネシア、オーストラリア、チェコ、ドイツ、フランス、ポーランド、日本、ロシアの9か国から合計54名(女子25名、男子29名)の選手が参加した。すでに来年開催の東京オリンピック出場が内定しているイタリアのLudovico Fossali選手、フランスのMickaël Mawem選手、ロシアのIuliia Kaplina選手のほか、世界各国のスピード選手らが参加



出場選手(左から今井、竹田、抜井、鈴木、二宮)



IFSC Connected Speed Knockoutロゴ



竹田創選手

した。日本からは、第2回スピードジャパンカップで決勝ラウンドに進出した5名(女子2名:二宮凛、鈴木可菜美、男子3名:竹田創、抜井亮瑛、今井結太)の選手が参加。6月下旬にIFSCから同イベントの開催案内が届き、7月中旬に日本の参加が決まり、選手参加募集期間がイベント直前の極めて短かったこと、コロナ禍でクライミング自体の練習機会が十分に取れない中、スピードクライミングの練習ができる選手がほとんどいなかったこと、更に、多くの選手が8月9日からの開催を控えているリードジャパンカップ出場を優先するなどの事情から、本イベントへのフルエントリー(男女最大各5名)とはならなかった。このような状況下で、参加してくれた前述5名の選手には敬意を表したい。

<日本会場の様子>

7月25日(土)午前、葛飾区東金町運動場スポーツクライミングセンターにて本イベントを非公開で実施した。本イベントは急遽、コロナ禍の中JMSCAが実施する初のクライミングイベントとなった。そのため、選手、イベントスタッフ、施設スタッフの事前および当日の健康状態チェック、当日の3密防止対策など、リード

ジャパンカップ開催のためにJMSCAが入念に準備していたコロナ対策を本イベントに適用し、万全の準備で当日に臨んだ。

<競技形式>

本イベントの競技形式は、予選では通常大会と同様2人1組でのタイムレースを左右のレーンで各1本ずつの合計2本、その後、決勝ラウンドにて優勝決定戦か3・4位決定戦まで進出することを想定して、参加選手全員が1人ずつ4回登るものであった。決勝ラウンドで選手が1人ずつ登ったのは、別々の場所で登っている2選手が同じ空間で競っているように見せるために画像を合成しやすくするためであった。本来、決勝ラウンドは、2人一組での勝ち抜き戦(knockout方式)なので、相手の様子も考慮しながらのレースとなるが、本イベントでは決勝ラウンドにおいても予選ラウンドと同様に自分自身のレースに集中する登り方が求められたようであった。

<競技成績>

IFSC初の試みである本イベントの初代優勝者は、女子ではポーランドのAleksandra KALUCKA選手(決勝タイム7.460秒)、男子ではインドネシアのRahmad ADI選手(決勝タイム5.770秒)となった。KALUCKA選手は、昨シーズン出場したワールドカップ(スピード)の3大会すべて決勝ラウンドに進出し、シャモニー大会では3位にも入っている実力者であり、ユース大会での活躍は知られているが、シニア大会での優勝は初めてと思われる。ADI選手は今年3月からインドネシア代表チームに選ばれたばかりの国際的には無名な19歳の選手であった。インドネシアチームには、ADI選手よりも速いタイムを持つ同世代選手がいるとのこと。今後のインドネシアスピードチームの動向にも注目したい。

日本選手は、予選タイム上位16名が進出できる決勝ラウンドには、残念ながらひとりも進出することはできなかった。とはいえ、日本国内のスピードクライミング練習環境の不足、コロナ禍におけるクライミング自体の練習不足を考えると、本イベントにエントリーしてくれた日本人5選手の積極性に拍手を送りたい。

<日本選手に関するエピソード>

本イベントのライブ配信を見ていた、オーストリアのスピードクライミングコーチ(スピードクライミング強国ポーランド出身者)から、「竹田創選手の将来が楽しみだ」とのコメントが予選ラウンド終了直後に著者に届いた。さらに翌朝、スピードクライミング強国の一つインドネシアのスピードクライミングヘッドコーチからも、「竹田選手はとてもいいスピード選手だ」とのメッセー

ジが著者に届いていた。日本選手の決勝ラウンド進出は今回かなわなかったが、竹田選手は自身のポテンシャルの高さを今回のイベントを通して世界に示すことができたと考えられる。スピードクライミング選手としての竹田選手の今後の活躍に期待したい。

<イベント運営について>

本イベントに参加するにあたり、JMSCAと協定を締結した葛飾区には会場利用の際に多大なご配慮をいただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。また、急なイベント開催にもかかわらず、快くスタッフをお引き受けいただいた方々にお礼申し上げたい。

<おわりに>

本イベントでは、素人では対応が難しい高いレベルの撮影機材と撮影技術が求められていた。本協会が本イベントに参加するためには、この撮影条件をクリアする必要があった。IFSC事務局に相談したところ、撮影機材・スタッフについてはIFSCに手配いただいた。このような新しい企画を実現してくれたことと、日本参加のために全面的にサポートいただいたIFSCに感謝の意を表したい。

皆さん、ぜひ以下のリンクからIFSC Connected Speed Knockoutをご覧ください。

<IFSC Connected Speed Knockout 配信サイト> Youtube

<https://www.youtube.com/watch?v=SJyVjpK3r5o>

Facebook

<https://www.facebook.com/sportclimbing/videos/298261968273851/>

(理事・スピードクライミング日本代表コーチ 水村信二)

CAS審問について

本協会が申立人となって行っておりますスポーツ仲裁裁判所(CAS)における仲裁事案について、ご報告致します。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で2020年4月1日に開催予定であった審問期日が延期されていましたが、8月26日に審問期日が開催されました。

同審問期日の終了をもって審理終結となりましたので、後日、CAS仲裁パネルが仲裁判断を下す予定です。(その後、CASより2020年12月10日までに判断して通知するとの連絡がありました。但し、CASのルールでは期限をさらに延期することが出来るので、確定的な期限でない可能性もあります。)

第142回 Mountain World

チャムラン北西壁 29年前の登攀記録

池田常道

前号にお知らせしたように、ピオレドール2020には以下の4隊が選ばれた。マレク・ホレチェックとズデニェク・ハーク(チェコ)のチャムラン(7321m)北西壁、アラン・ルソーとティノ・ヴィラヌエヴァ(米)のテンギ・ラギ・タウ(6938m)西壁、スティーブ・スウェンソン、グレアム・ジーマー、クリス・ライト、マーク・リチー(米)のリンク・サール(7041m)初登頂、平出和也と中島健郎のラカポシ(7788m)南壁～南東稜である。

*

このうちチャムラン北西壁は30年近く前の1990年に、ドイツのシュテファン・ケーラーとベルント・エーベルレによって別ルートから登られていたことが明らかになった。

チャムランの北面では、1981年にダグ・スコット(英)とラインホルト・メスナー(伊)が、北東稜からアルパインスタイルで東西に長い頂稜に抜け、最低コルから主峰寄りの1ピーク(7010m)に立っているが、主峰頂上には立っていない。スコットは84年に、ジャン・アフアナシエフ(仏)および息子のマイケル、シェルパのアン・プルバが北東稜から北東峰(7290m)に初登頂、引き続いて主峰までの縦走を試みたが、中央峰(7235m)から北面へと下降している。

90年のドイツ隊は当初6人だったが高山病で2人が脱落、北西壁に挑むのはエーベルレとケーラーだけになった。エーベルレ夫人カトリンとケーラーのガールフレンド、ダグマル・シュタインに取付きまで見送られた2人は北西壁の右寄りから冰雪壁に取付き、傾斜40度から60度(最大70度)の斜面をほとんどロープも結び合わずにたどった。

最初のビバークは6200m地点の小さなプラットホームで嵐の一夜を耐え抜いた。2回目は6600mまで登って西壁へと移り、クレバスの中に小さなテントを張った。しかし、そこはクレバスに守られているというよりむしろ風の通路で、ひどく寒い夜を過ごさなければならなかった。

3日目の午前10時、残る700mの西壁をたどった2人はチャムラン頂上に立った。マイナス30度と寒気が

ひどく、強風で立ってられないので、早々に下降を開始。幸い視界は良く、もし霧に包まれていたら登りのルートを見つけるのも困難だったろうという。6200m地点でもうひと晩過ごした2人は、取付きで2人の帰りを待っていた女性たちに迎えられた。

*

「チャムランでは、生涯最高の肉体的コンディションだった」とケーラーは述懐する。「思い返せば、我々の登攀は、当時としてなかなかのものだった。チャムランの壁にしっかりと足跡を残したのだから」ともいう。

しかしながらそのシーズンのネパールは、トモ・チェセン(スロヴェニア)のローツェ南壁単独登攀という、世界の登山界を驚かせたニュースの陰に埋没してしまった。皮肉なことに、チェセンが主張した「快拳」は、時間の経過とともにフェイクニュースとして信用を失う結果に陥るのだが、まだピオレドールの創設前、インターネットがまだ発展途上にあつたあのころ、新聞・雑誌を初めクライミング専門誌でさえ、事の真偽を疑うことなく大見出しで報道したのだった。7000m峰の壁をアルパインスタイルで登った彼らの快拳は、登山史に記録されるべき内容に満ちていたのだが。

のちにフリードリヒスハーフェンの初代市長を務めたケーラー(60)は、高峰への情熱を抱き続け、2016年にインドのクン(7077m)、17年に中国のムスターグアタ(7546m)に登った。相棒のエーベルレはババリア・アルプスで登山ガイドをしている。



チャムラン北西壁
チェコペアのダイレクト・ルート(左)と1990年ドイツペアの登攀ライン(右)

まだ誰も登ったことがない

高柳 傑

まだ誰も登ったことがない、情報といえば写真くらいしか無い山というのは、非常に魅力的だ。好きな場所を好きなように登ることができる事が、自分にとっての最高の贅沢だ。

もちろん既登の山やルートも、素晴らしく、面白い体験が出来ることは間違いないが、「この先何が待っているのだろう？」という答えが分からないワクワク感を超えるものはないと思っている。

スマートフォン片手に大概のことは手軽に調べられる現代社会においては、そんな貴重な経験ができる機会は多くは残されていないだろう。

ここで気になることと言えば、果たしてそんな山や壁が本当に存在するのか？そしてその山や壁、氷瀑は未踏なのかどうかだ。

情報が、すぐ簡単に入手できるということは、反面、世に知られていない事柄については極端に情報が少ないか、皆無であるという事なのである。

昨今の登山シーンにおいては未踏壁と言うのはかなり数が少なくなっているのが実情である。海外であれば国の都合で入域が難しいエリアが存在するが、国内においてはすでに多くが登られている。

前述のように、現在ではスマートフォンやPCで衛星写真や登攀情報などを誰でも簡単に閲覧する事ができる。初登情報や壁の形状、氷瀑になりそうな滝など容易に調べる事が可能だ。技術の進歩はありがたい。

もちろん現場に行かなければ本当にその壁が登攀対象になるのかは断言できないのだが、二次的な情報を取得出来るのは大きな武器になっていることは否めない事実である。

私自身グーグルアースなどを活用することによって北海道、礼文島の氷瀑をいくつか登る事ができた。

このように国内だけでも情報入手の簡易化によって大きく可能性が上がるのだから海外に目を向ければより可能性が広がるのは明白である。私がかつて行ったタイのジャングル廻行もグーグルアースを駆使することで見つけ出したラインを辿ることができたのである。

技術の進化と言うのは何もインターネットに限られるものではなく、クライミングギアにも当然当てはまる。



例えば、20年前に比べてウェアもギアも格段に軽量化されている。つまりそれだけ身に着けて登る重量が減ったのだから、登れるグレードも間違いなく上がっていると単純に考えられる。さらに、道具だけではなくクライミング技術自体も向上しているのだから、過去エイドでしか登れなかったラインをフリー化出来るチャンスは大きく膨らむ。既登の課題においてもまだ冬季フリー化されていない壁やラインはいまだに、数多く存在する。

私自身今シーズンは南アルプス甲斐駒ヶ岳ダイヤモンドフランケAを冬季フリーで完登することができた。道具の進化に助けられたのは間違いない事実である。勿論道具の進化だけでなく自身のクライミング能力やラインを読む目も非常に大事なものは、今も昔も変わらぬことではある。しかしそれに道具や技術の進化を合わせて考えると、国内の壁に新たなラインやフリー化の可能性を大きく見出すことができると私は感じる。

近年は暖冬の影響で標高の低いエリアの雪は少なく、標高の高いエリアでも例年より積雪量は少ない。さらに厳冬期にも関わらず雨が降ったりと、残念な状況が続いている。しかしこれはこれで、視点を変えれば、今まで少ない日数では入山出来なかったエリアや雪崩リスクの高い山にも比較的风险を抑えて入山することが出来るようになったと考えることもでき、一方的に悪い話ではないという一面もある。

さらに、海外登山においても情報入手が自宅で簡単に出来るというメリットは大きい。数年前ネパールのテング・ラギ・タウ峰にトライしたのだが、これも海外のサイトを調べ敗退した記録を目にしたからこそであった。結果は残念ながら6000m地点での敗退となってしまったが、対象となる山の選定段階で多くの情報入手出来たことはありがたい限りである。

この遠征自体は敗退という結果で終わってしまった。しかし、このトライにより入手出来る情報が増えた恩恵は大きく、今後の遠征にも役に立つ貴重なものであると

信じている。とはいえ、あくまで二次的な情報という事には変わりがない。その年、その年のコンディションを注意深く観察する必要はあるし、実際、現場に行き始めてわかることが多いのも事実である。

テンギ・ラギ・タウの場合は西壁という事もあり、この年の降雪状況や気温によって写真などの情報とは全く異なっていた。そうした違いは多々生じるものである。

実際、事前に考えていたラインは、氷も雪も想定よりはるかに少なく思い通りには行かなかった。テンギ・ラギ・タウ峰については簡単に情報を入手出来るのだが、単純にそれだけに惑わされず、注意深く山の情報、天候などを観察し、微調整を加えつつ、理想の登山のスタイル

に近づけていくべきであった。これを実現、実践することこそが現在進行形でトライ出来る僕らにとっての大きなアドバンテージとなるのだから。

高柳 傑 (タカヤナギ スグル)

1988年生まれ 学生時代に登山、クライミングに目覚める。その後、社会人山岳会の横浜蝸牛山岳会に入会。アルパインクライミング、フリークライミングを中心に活動。様々な種類のクライミングを楽しむ。

主な経歴

- 2014年 タイ ジャングルでの46日間の遡行、登攀
- 2015年 アラスカ・カヒルトナ氷河 ハンター 北壁の登攀
- 2016年 カナダ・ホールピーク 新ルート登攀
- 2017年 ネパール、テンギ・ラギ・タウ峰 西壁トライ (6000m地点まで)
- 2017年 甲斐駒ヶ岳 北坊主岩 北東壁登攀 (12月~1月)
- 2019年 甲斐駒ヶ岳 ダイアモンドフランケA 冬季フリー化



令和2年度
7月・8月会務報告

- (1) S C 国際委員会
7月3日(金) Web会議 水村理事他6名
- (2) S C 医科学委員会
7月3日(金) Web会議
六角理事他16名
- (3) CLUB ITADAKI 打合せ
7月7日(火) Web会議 尾形専務理事他
- (4) スポーツ庁の普及・マーケティング状況のヒアリング 7月7日(火)
於：JMSCA事務局 尾形専務理事
- (5) I F S C Web会議
7月7日(火) 平山副会長、水村理事
- (6) 令和元年度期末業務・会計監査
7月8日(水)~9日(木) 於：JMSCA事務局 中島・古屋監事、尾形専務理事、小野寺常務理事、相良理事
- (7) デジタル情報小委員会
7月10日(金) Web会議
水島常務理事他
- (8) L J C ビレーヤー講習会
7月11日(土) 於：盛岡市 村岡理事
- (9) ガバナンス委員会

- 7月13日(月) Web会議
恒石委員長他5名
- (10) 強化委員会
7月13日(月) Web会議
安井委員長他8名
- (11) ガバナンスコードNF向け適合性審査第2回説明会 7月15日(火)
於：J S O S 14 F 尾形専務理事
- (12) 7月常務理事会・理事会
7月15日(火) Web会議 八木原会長他
- (13) 登山部会
7月15日(火) Web会議
水島常務理事他12名
- (14) S C 部委員長・副委員長会議
7月15日(火) Web会議
合田常務理事他
- (15) 国体委員会
7月16日(水) Web会議
西原委員長他10名
- (16) 葛飾区との協定締結
7月17日(木) 於：葛飾区役所
八木原会長、平山副会長
- (17) 指導委員会
7月20日(日) Web会議
蛭田理事他14名
- (18) J O C 第1回総務本部長会
7月21日(月) Web会議 尾形専務理事
- (19) 遭難対策委員会
7月21日(月) Web会議

- 町田理事他15名
- (20) I F S スピードクライミングイベント
7月25日(土) 於：葛飾区東金町スポーツクライミングセンター 水村理事他
- (21) (一社)日本パラクライミング協会小林幸一郎・鈴木直也共同代表来局
7月28日(火) 八木原会長、尾形専務理事
- (22) J O C 評議員会
7月28日(火) 於：J S O S Web会議
八木原会長
- (23) 防災管理点検
7月28日(火) JMSCA事務局
- (24) J S P O 評議員会
7月31日(金) 於：品川プリンスホテル
尾形専務理事
- (25) JMSCA定時総会
8月2日(日) JMSCA事務局
Web会議 八木原会長他
- (26) ガバナンス委員会
8月3日(月) Web会議
恒石委員長他5名
- (27) 第33回L J C
8月9日(日)~11日(火) 於：岩手県運動公園スポーツクライミング競技場
平山副会長、村岡理事他
- (28) デジタル情報小委員会
8月20日(木) Web会議
水島常務理事他
- (29) アイスクライミング説明会
8月21日(金) Web会議
水島常務理事他
- (30) C A S 審問
8月26日(水) 於：日本国際紛争解決センター 平山副会長他
- (31) C A S 審問プレスリリース 8月27日(木)
- (32) ガバナンス委員会
8月31日(月) Web会議
恒石委員長他5名
- (33) デジタル情報小委員会 8月31日(月)
Web会議 水島常務理事他

寄贈図書

会 報	(公財)健康・体づくり事業財団	「健康づくり」No.508 202008
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第638号
	愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第438号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」2020年8月 No.368
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」9月号 No.547
	(公社)日本スカッシュ協会	「SQUASH」Vol.87
	やまびこ山想会	「やまびこ」第189号
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.97 No.1086
	(公社)日本山岳会	「山」2020年8月号 No.903
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.729
雑 誌	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」8月号 第475号
	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」9月号 No.879
	(株)山と溪谷社	「山と溪谷」9月号 No.1026
新 聞	(株)シマノ	「Fishing Café」Vol.66
	(株)日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2297号、第2298号、第2299号

8月は理事会が無かったので理事会報告は休載しました。

第17回山岳遭難事故調査報告書(1)

新型コロナウイルス感染症による登山活動への影響(次年度課題)

2020年1月頃より発生した新型コロナ災禍は、登山自粛という我が国登山史上、経験したこともない事態をもたらした。

4月には、山岳4団体声明によって山岳スポーツ活動の自粛要請があり、登山道・山小屋から人が消えた。幸い、5月には政府の緊急事態宣言解除を受けて、ある程度まで、登山活動が復活したが、多くの登山域では引き続き自粛状態にあり、山小屋を始め、様々な登山関連施設、関係者にもたらす影響は計り知れない。

コロナ問題が、今後どの程度の期間続くのか、予測がつかないため、安全登山への影響も予測が難しい。登山道の安全性は常に維持管理ができてこそ、保たれる。コロナにより、維持が難しくなれば、登山道は荒廃し、道標、鎖場、梯子、固定ロープなどの傷みが懸念される。

今回の事故調査では、警察庁事故統計は、2019年12月締めでコロナの影響を見ることできない、山岳団体事故データベースも3月を最後に情報が無い。

それでも、あえて「コロナ問題が及ぼす登山へ影響」を冒頭に持って来ざるを得なかったのは、今後の登山事故の傾向を検討する上で、安全登山問題の重要な転回点になると判断したからである。

一方、登山界が抱える最大の問題は高齢化である。登山者人口の半数弱を抱える登山団塊世代(昭和15年～30年生まれ/80歳～65歳)が高齢者となり、新しい登山ブームが来ない限り、登山者人口は減少していくことが予想される。併せて、疲労、疾患、ヒューマンエラーの増加など高齢化に伴う事故も増加していく。

遭難対策関係者として、「コロナ問題」と「高齢化問題」、現在抱える2大安全登山問題に、常に目を向けておかなければならない。

主題：複雑系事故要因の可視化と、減遭難への取り組み方について

本報告は数多い要因から構成される事故情報を如何に分かりやすく可視化するかを、主題とした。特に警察庁データから得られる貴重な県別情報や経年変化を生かすため、無事救出、負傷、死亡などの3成分を利用した三角グラフを作成した。

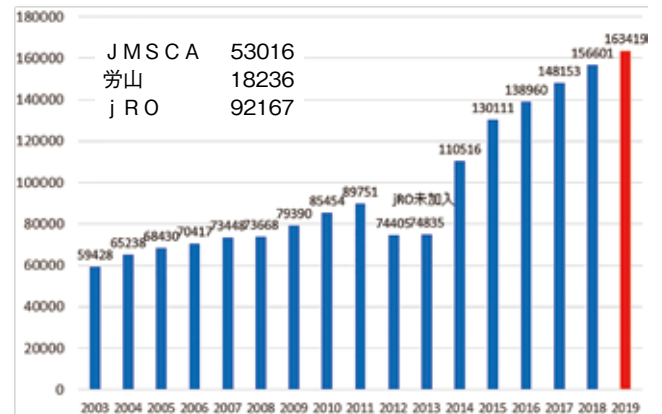
一方、減遭難に取り組むため、どのような事故要因を取り扱うべきなのか、基盤要因と付加要因2タイプの要因群について言及した。

山岳三団体の組織情報と事故調査

三団体(JMSCA、労山、jRO)における会員数は、jROがさらに約1万人弱(9,194人)増加したのに対し、日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)、日本勤労者山岳連盟は僅かに減少した。その結果、3団体の全会員数は163,419人(事故発生確率算出に使用)となった。

3団体内での事故者数は昨年と同様1038人であった。死亡者数は前年度より12人減少して30人となっている。事故アンケート回答率は、24.2%と、低め安定となってしまう。関係者のより強力な協力が望まれる。

2003-2019	年度	会員数	事故者数	死亡者数	アンケート回答数	回収率(%)	対会員事故比1:x	対会員死亡比1:x	死亡/事故者(%)
目山協、労山、都岳連共催	2003	59428	528	23	199	37.7	112	2584	4.4
目山協、労山、都岳連共催	2004	65238	420	1	169	40.2	155	5931	2.6
目山協、労山、都岳連共催	2005	68430	446	28	96	21.5	153	2444	6.3
目山協、労山、都岳連共催	2006	70417	479	31	230	48.0	147	2272	6.5
目山協、労山、都岳連共催	2007	73448	516	24	227	40.9	142	3060	4.7
目山協、労山、jRO	2008	73668	527	22	218	46.9	139	3349	4.2
目山協、労山、jRO	2009	79390	530	37	179	29.4	149	2146	7.0
目山協、労山、jRO	2010	85454	574	24	188	34.1	148	3561	4.2
目山協、労山、jRO	2011	89751	629	21	190	34.1	142	4274	3.3
目山協、労山	2012	74405	613	18	214	34.9	121	4134	2.9
目山協、労山	2013	74835	703	31	220	31.3	106	2414	4.4
目山協、労山、jRO	2014	110516	850	38	221	26.0	130	2908	4.5
目山協、労山、jRO	2015	130111	940	37	247	26.3	138	3517	3.9
目山協、労山、jRO	2016	138960	1090	30	228	20.9	127	4632	2.8
目山協、労山、jRO	2017	148153	1077	37	382	35.5	137	4004	3.4
目山協、労山、jRO	2018	156601	1077	42	315	29.2	145	3729	3.9
目山協、労山、jRO	2019	163419	1038	30	251	24.2	157	5447	2.9

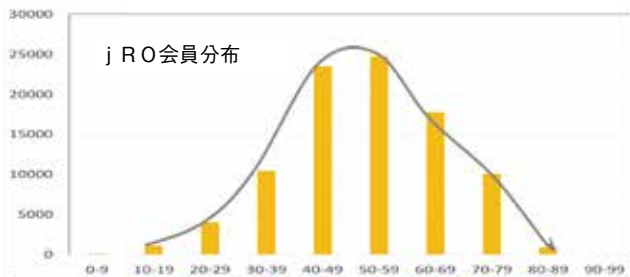
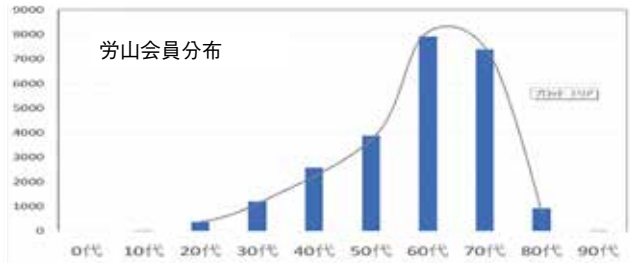
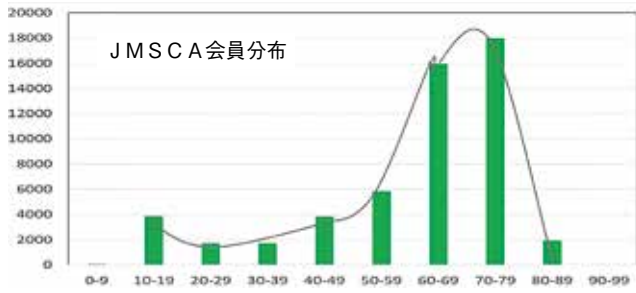


3大山岳組織は時代の変化にもまれながら16万会員へ

各山岳組織会員の年齢構成

各山岳組織を構成する会員の年齢構成を検討する。なお、組織によっては、会員データの登録、抹消が異なるケースもあり、年齢構成の分布曲線は多少変化する。3組織の年齢構成比較の参考値として紹介する。

図より明らかなように、JMSCAと労山は類似した年齢分布を示し、似かよった登山体質にあると理解される。一方、jROは40～60歳で半数を占め、JMSCAでは50～70歳で63%と両者の違いは大きい。



レジャー白書から見た登山活動状況

登山活動（特に登山人口調査）の経年変化を正確に知る事は難しい。唯一統計的に推定した「レジャー白書」があり、数年単位では「総務省統計局」がある。

レジャー白書は、登山を観光・行楽部門に位置づけ、「登山」項目がある。参加人口、活動費、構成年齢などが分かる。平行して「ピクニック、ハイキング、野外散歩」があるが、登山参加者の3倍ほどの参加があるものの、登山に含めるには問題が多いため、対象外としてきた。

登山への関心は、「余暇活動の潜在需要に見る登山」調査から見ると、ここ10年間で大幅に関心が薄れたと考えられる。特に、女性層ではどの世代においても10位以内に出てこない。

一方、登山キャンプ用品については堅調で、未だに需要が拡大している。

ヤマケイ(2017)によれば、男性50歳台、女性40台がボリュームゾーンとのこと。関心はテント泊登山、キャンプ、雪山登山に高く、クライミング系には関心が薄いとのこと。

登山頻度は年間平均活動回数5.5、同時期ヤマケイでは1回/月=31.2%、1回/週=13.9%となった。登山に関心のある人々と一般人を対象とする調査法の

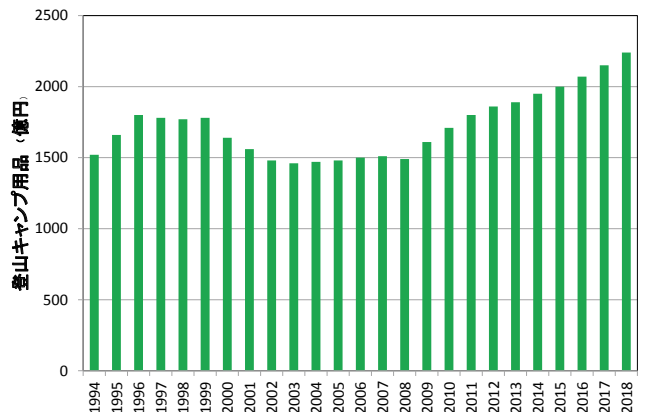
違いが読みとれ興味深い。

なお、この調査を基に、組織登山者の平均頻度を17回/年とし、発生確率の計算に適用した。

登山人口については、2009年の登山ブーム最高値に比べ、約半数弱にまで減少している。

白書の出版が8月のため、2018年での推定登山人口であるが、曲線の傾向から見て680万人前後であろう。

レジャー白書から得られる登山参加者人口は、参考値である。1994年から始まった平成登山ブームから遭難者数が増大するが、明確な対応関係は見られない。



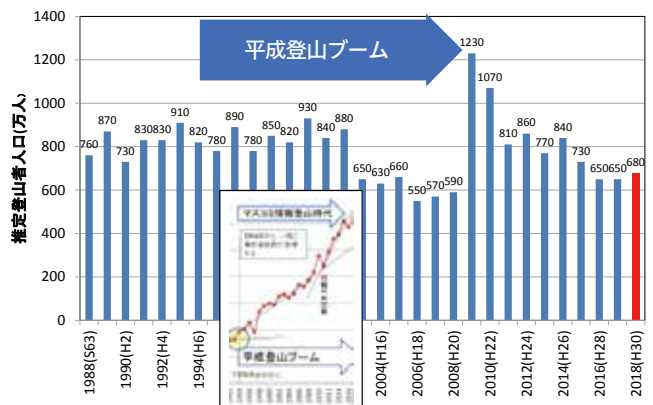
登山キャンプ用品の需要は増加しており、登山志向が変化しているのかも知れない

余暇活動の潜在需要にも見る登山(上位10種)

	男性	女性
10代	—	—
20代	8位	—
30代	8位	—
40代	10位	—
50代	9位	—
60代	9位	—
70代	—	—

レジャー白書(2018)

登山活動への関心は、女性層で、大幅に低くなっている。



推定登山者人口の経緯

2019年警察庁の事故データ

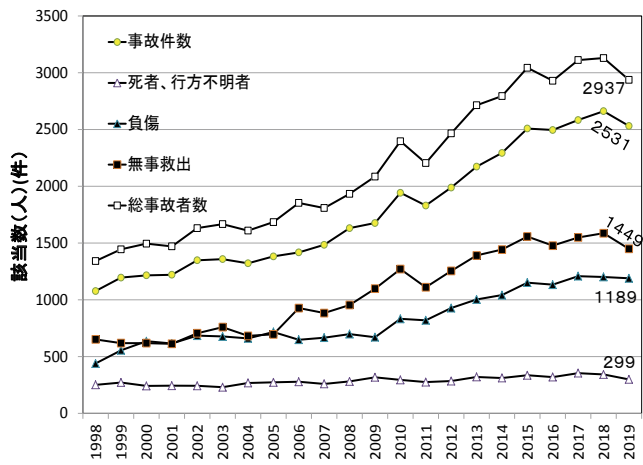
本データは、毎年6月末に公表される警察庁の事故統計を基に、再分析後・データ加工したものである。

なお、警察庁では2019年1月から12月までの調査結果としている。

2019年山岳遭難事故の傾向

冒頭で紹介したが、警察庁事故統計は12月締めである。そのため、2020年のコロナ災禍の影響は受けていない。

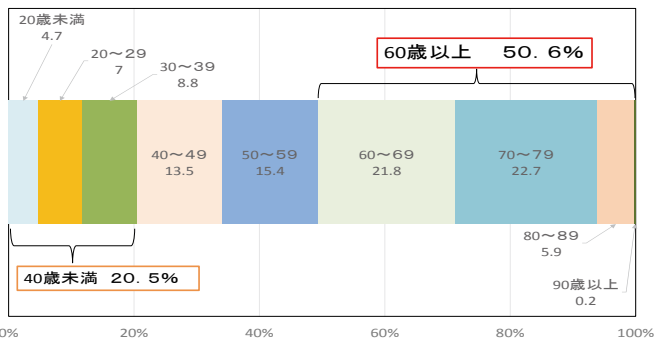
しかし、発生件数は2531件(対前年差130減)、遭難者2937人(対前年差192人減)と前年より大きく減少した。この原因には、登山団塊世代(昭和15～30生まれ＝65歳～80歳)が高齢化し、後期高齢者領域で、加齢による自然減少が始まった可能性がある。



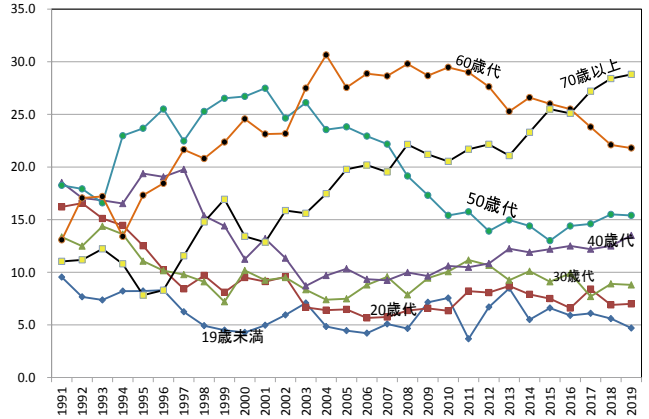
事故件数が、登山者の内的要因(加齢)減少始めた可能性がある

事故者の年齢層別分布は、60歳以上の高齢者が半数を占める。対して、40歳以下の若年層は僅か20.5%となり、60歳単一代(21.8%)よりも少ない。このような分布は世界に例を見ない極端な高齢者分布となっている。

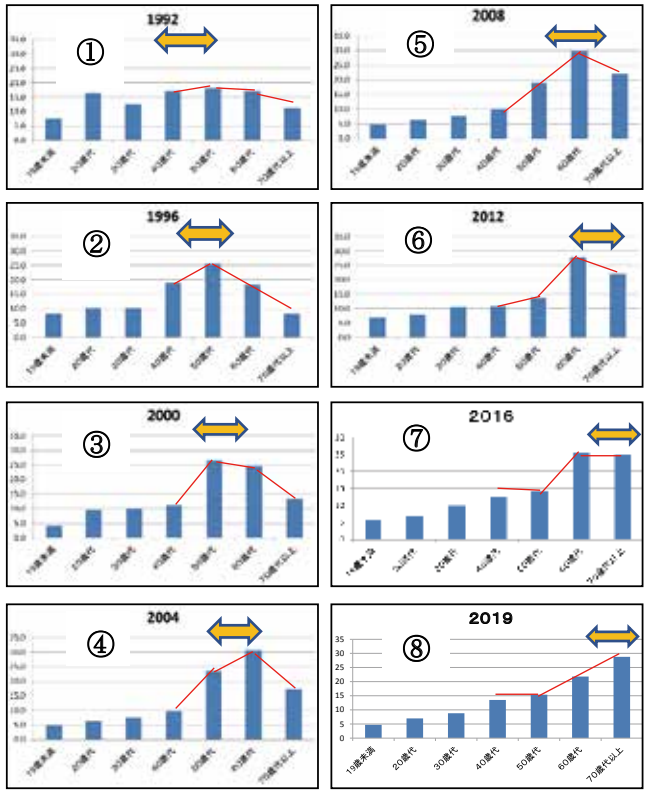
今後の世代別変化は、60歳世代の変化曲線(約30% max)と70歳以上が同じような曲線を描くのか、さらに30%を越えて事故が、この世代で多発するのか。さらに80歳世代にシフトして急伸するのか、分からない。



一般常識で判断すると、登山団塊世代は確実に減少し、事故数を減少させていくと予想される。



70歳以上で唯一増加、今後の変化を占うKey世代となっている



高齢化する登山団塊世代昭和15年～昭和30年(1940～1955)生まれ、図中黄色矢印は団塊の年齢幅を示す
 上図は1992年から4年おきに2016年まで事故年齢分布曲線のピークがシフトする様子を示した。2018年には70歳以上がピークになった。安全登山は70歳世代の動向がカギを握る

事故者の登山目的と事故態様

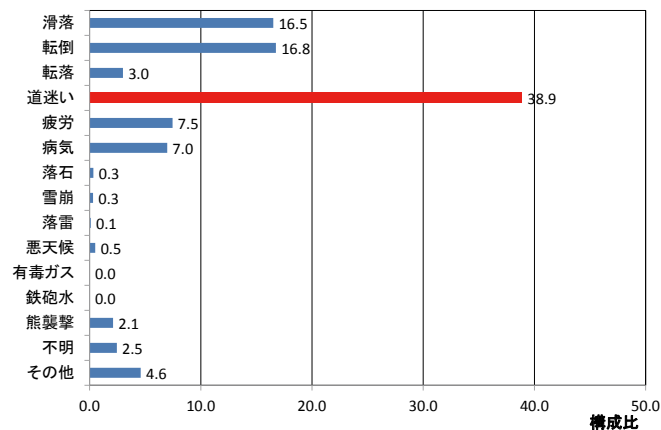
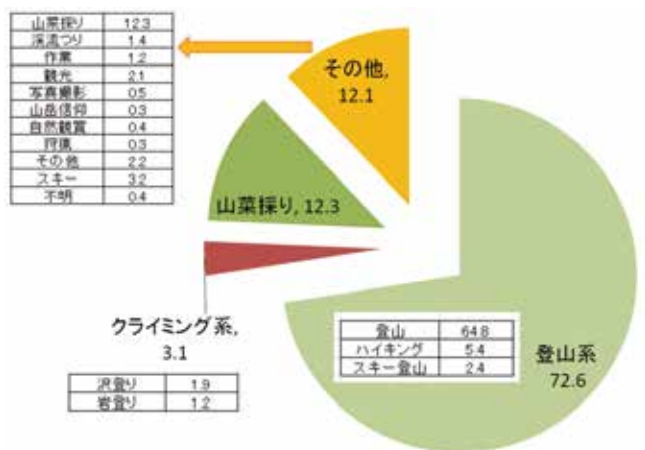
事故者の登山目的における登山系、非登山系の割合75：25はここ数年計ったように変化がない。登山事故の3大要因(道迷い、転倒、滑落)も同様である。数年の範囲で、次年度の事故者総数がある程度の精度で予測できれば、各要因については高精度で予測することができる。つまり、各事故要因の発生確率が同じと

ということになる。

もちろん、登山事故は環境要因に支配される。悪天候（豪雨、豪雪、雷雨）、落石、雪崩、火山活動など、予測できない事故への外的要因はあるが、その影響は少ない。

今回は、過去5年に渡って発生がなかった落雷事故が3件発生し、野生動物の襲撃は前年18件から62件に増加している。

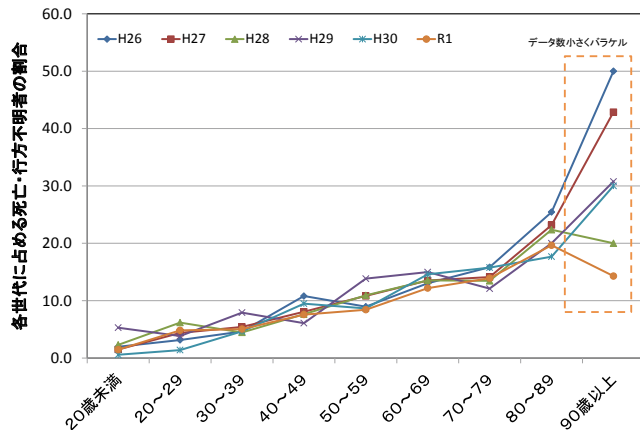
一般には登山事故といえば雪崩というイメージが定着しているが、大きな雪崩事故が発生しない限り、0.3～0.5%（5～20件）あたりで推移する。



深刻な事故に及ぼす高齢化の影響

高齢化した登山者の特徴は、行動が慎重になるため、軽度の事故が多くなることであるが、ハインリッヒの法則にもあるように、小さな事故の多発が重大事故につながる可能性は増大する。

各世代に占める死者・行方不明者の割合は、図から分かるように、6年間のデータから、年齢の増加にほぼ比例して、死者数が増える。なお、90歳代はデータ数が少ないため、ここではオミットしてみるべきであろう。

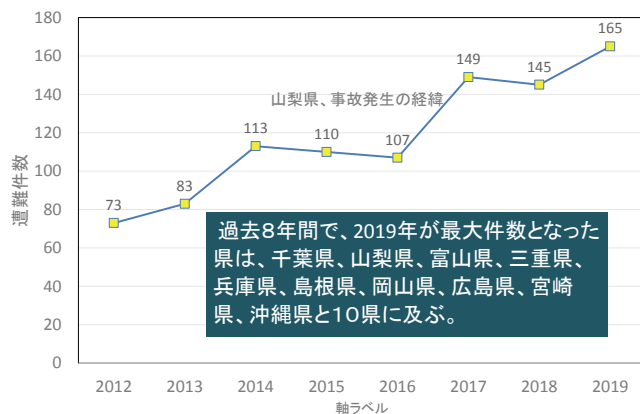


過去6年間に於ける、各世代に占める死亡・行方不明者の割合を描いた。図より、加齢に比例して死亡・行方不明者の割合が増加していくことが分かる。90歳以上はデータ少なく無視。

事故が増加している地域と減少している地域

山岳県である長野県は、長い間、事故件数、事故総数、死者・行方不明者数とも、全国第一で、突出していた。しかし、2019年では長野県で、死者・行方不明が57人から27人にまで減少した結果、山梨県が全国一となった。一時的現象かもしれないが、注目すべき現象である。

2019年で、事故が20件以上減少した県は東京都、群馬県、神奈川県、新潟県、長野県、静岡県、石川県、一方、20件以上増加した県は山梨県、富山県、岐阜県、三重県であった。



過去8年間で、2019年が最大件数となった県は、千葉県、山梨県、富山県、三重県、兵庫県、島根県、岡山県、広島県、宮崎県、沖縄県と10県に及ぶ。

事故数が全県一様に下がった訳ではない。むしろ、増加し、過去最高値を示した県も多い。

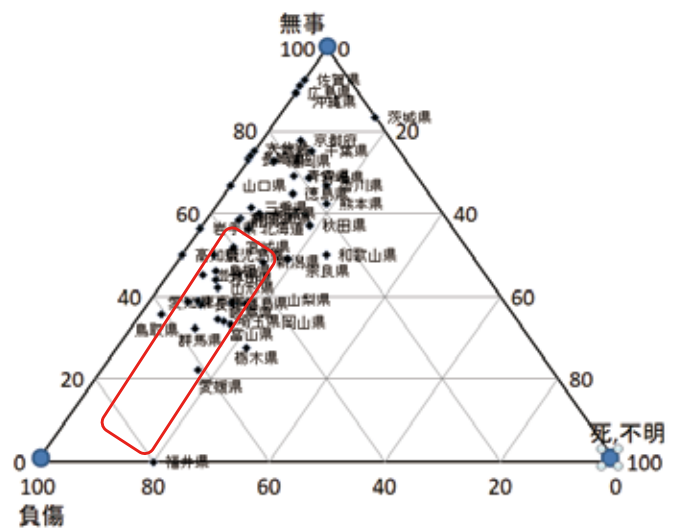
前述の通り、2019年で、事故発生件数が130件減少したのは、全国一律に発生している現象ではない。結局、遭難減少した県は24県で、339件減少、増加した県は21県209件増加となり、130はその差である。なお、2県は変化なしであった。

一方、図のように過去8年間で、2019年が最高値に増加した要注意県が10県もある。

「事故の増加と減少の場所的違い」がどのような背景によるものであるのか、早急に検討する必要がある課題である。

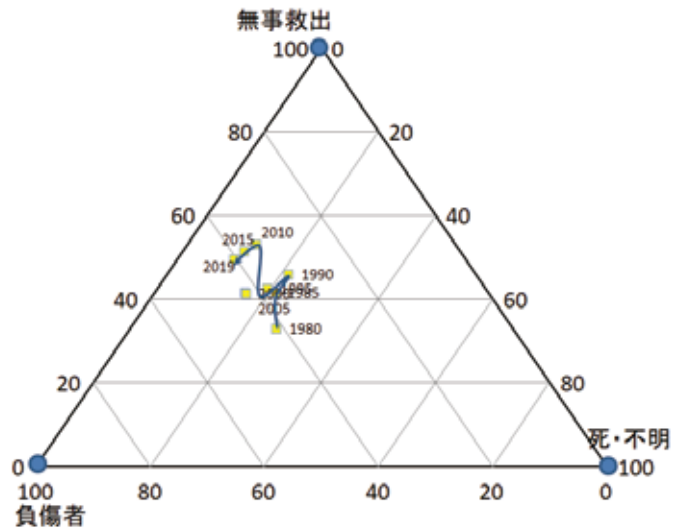
2019年事故発生件数		2019年死亡・行方不明	
1 長野県	265	1 山梨県	31
2 北海道	202	2 長野県	27
3 山梨県	165	3 富山県	22
4 富山県	147	4 北海道	19
5 兵庫県	126	5 新潟県	17
6 新潟県	109	6 兵庫県	14
7 東京都	106	7 福島県	13
8 神奈川県	104	8 栃木県	13
9 静岡県	90	9 秋田県	13
10 岐阜県	84	10 岐阜県	13
11 群馬県	81	11 奈良県	10
12 福島県	80	12 群馬県	10
13 山形県	77	13 山形県	9
14 三重県	74	14 埼玉県	9
15 滋賀県	67	15 東京都	9

2019年の(A)事故発生件数と(B)死者・行方不明者のトップ15位までを2票にまとめた。両者の順位は一致しない。中央の線は、同一県を結んだものである。(A)=(B)、(A)>(B)、(A)<(B)の3ケースがあり、事故発生の特徴を知るうえで、目安となるが、死者、負傷者、無事救出の3要因同時に検討する手法が求められる。



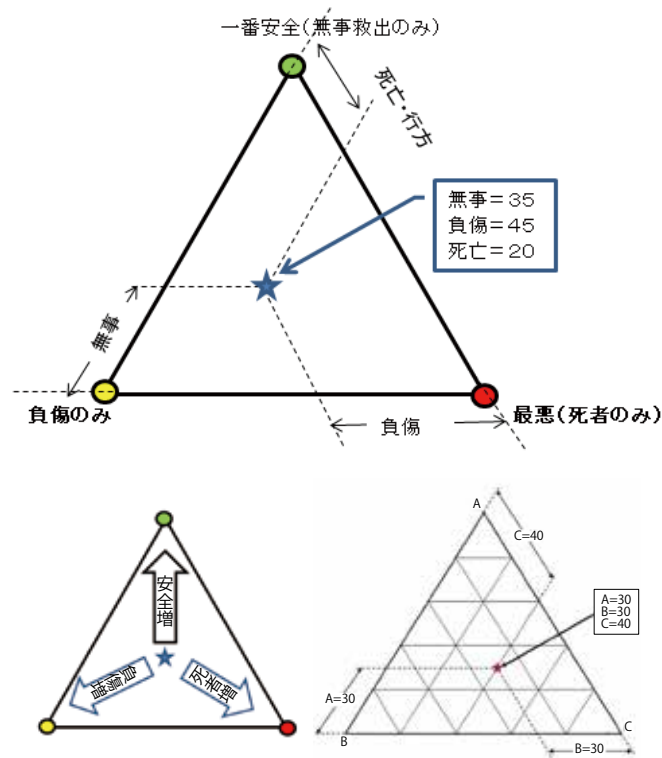
図は下に向かって、安全性が低下する。群馬、栃木、愛媛、福井など、事故発生トップグループから外れたグループが浮き上がってきた。

警察庁の全国山岳事故データの推移



1980年～2019年の事故形態の経年変化。全体として、安全側に推移している。

文中の表欄、グラフのデータが小さくて読みづらいと思います。本協会のHPにパワーポイントのデータを掲出してありますのでご参照ください。
<https://www.jma-sangaku.or.jp>



三角グラフ適用
3成分分析などに使用

1県の事故データ(無事救出、負傷、死亡+行方不明)の3要素の割合から、その状態を判断する手法として三角グラフを用いて、分析することにした。この手法は、3要素の絶対数には関係しないため、事故多発県と少数県の比較が可能になる。

(青山千彰)

コロナ禍の中で、その後で（その1）

（一社）大阪府山岳連盟会長 飛田典男

百年に一度と云われる世界的な感染症の蔓延は世界中を混乱の極みに陥れている。山の世界も例外ではない。全国的な会員数の減少に歯止めが掛からない状況は周知のことだが、コロナ禍で一気にこれが加速すると考えられる。ここで取り組まなければならないことは、言うまでも無く、

◎新たな会員の獲得であり、

◎既存会員の声を傾聴することである。

山の豊かな自然に魅了され、山に足を運ぶ人達は少なくない。これからも絶える事はないだろう。しかし、現在、山に入っている大多数の人達が嘗ての様な岩と雪を求めてはいない。という現状を直視しなければならない。岩と雪を中心に活動する国内の山岳会の割合は恐らく5%にも満たないだろう。未だに、この昔の岩と雪のイメージから抜け出せていないことが我々関係者の最大の問題である。岩と雪の幻影に囚われていては、大多数の登山者が求めるニーズを汲み取ることは叶わない。過去の成功体験のイメージのままである限り、新たな会員を獲得することはあり得ない。これらのヒントは、ネット社会に目を転ずれば容易に理解される。

先日、「コンパス」<https://www.mt-compass.com>のサイトを覗いて、今、山に登る人達のニーズが実に良く凝縮されていることに感心してしまった。

我々に、「ヤママップ」や「コンパス」の情報やサービスを超越する何ができていだろうか。日本国内に限らず世界中の山についてもネット上で最新情報が提供され、シェアリングされている。これらに対して、我々が新たな会員に魅力となるナニカを提供できるか否かが問われている。情報量が限られ、特定の人達だけがこれを独占していた時代には、それを統括する組織の価値は多大であったが、情報の共有化が格段と高まった現代では、その価値は無いに等しい。それにも拘らず、未だに過去に胡坐をかいていないだろうか。この情報化社会で、更に格段と開発の著しく利用が渴望されているAI (Artificial Intelligence) は、留まるところを知らない勢いで加速している。これを活かさない手はない。これらを活かしながら、生きた知識と、リモートでは伝え切れない現場でのコーチング・スキルを磨くことが糸口の一つではないだろうか。山に登るだけであればガイドに頼ることも可能だが、自立した登山を望むのであれば、そこに一縷の活路があると考えている。そこで、問題となるのがこれを担うコーチ（指導員）の存在である。現

場で実際にコーチングする優秀な人材の確保に力が傾注されているだろうか。この人材の確保の阻害要因は何だろうかを考えなければならない。

小生が15年前に大阪で指導員養成を担当させていた際に、連盟傘下の大多数の会員は指導員に求められるような知識や技術レベルは必要とされておらず、ほとんどがカリスマ的なトップに率いられ、運営されていた。これらの会員も次世代を担う後継者の育成が急務となりつつも適切な手を打てないまま齢を重ねていた。そこで、思い至ったのが指導員となる一步手前の知識と技術の基礎をマスターしていただくリーダーを養成することである。それをカタチにしたのが、大阪府山岳連盟公認の「登山インストラクター制度」である。この講習会の参加条件は20歳以上とし、年齢以外の制限を一切設けなかった。現在まで、約80名が認定を受け、この合格者が更なるステップアップとして指導員（現コーチ）を目指し、毎年コーチが誕生している。

その一方で、指導員の資格を活かす実践の場として「山スクール事業」を立ち上げ、指導を行いながら更なるステップアップの道を拓いてきた。この循環を全国で確立することが組織の維持と新たな会員を増やし続けるポイントであると考えている。

最近のJMSCA指導委員会の議事録には、登山のコーチ資格の実技合格者の報告が散見されるようになったことは喜ばしい限りである。また、JMSCA公認の「夏山リーダー制度」が本格的に昨年からはスタートしたが、この制度のポイントは継続的な取組とコーチ陣のコーチングテクニックの向上に掛かっている。その為には、コーチの教える能力を磨くことを個人に頼らず共有化することが重要な課題である。これらを継続的に展開していくシクミの構築とこれに取り組むスタッフの確保が急務であることは論を待たない。団塊の世代がリタイヤする直前の今が最後のチャンスだと考えている。

しかしながら、この自立した登山者の養成自体が新しい登山者のニーズの一つに過ぎないものであり、今、考察しなければならない課題は無数にある。新たな展開を次回に模索してみたい。



スポーツ団体ガバナンスコード（2）

2019（令和元）年6月10日にスポーツ庁から通達されたガバナンスコードは、以下の13原則を規定している。

- 原則1 組織運営等に関する基本計画を策定し公表すべきである。
- 原則2 適切な組織運営を確保するための役員等の体制を整備すべきである。
- 原則3 組織運営等に必要な規程を整備すべきである。
- 原則4 コンプライアンス委員会を設置すべきである。
- 原則5 コンプライアンス強化のための教育を実施すべきである。
- 原則6 法務、会計等の体制を構築すべきである。
- 原則7 適切な情報開示を行うべきである。
- 原則8 利益相反を適切に管理すべきである。
- 原則9 通報制度を構築すべきである
- 原則10 懲罰制度を構築すべきである。
- 原則11 選手、指導者等との間の紛争の迅速かつ適正な解決に取り組むべきである。
- 原則12 危機管理及び不祥事対応体制を構築すべきである。
- 原則13 地方組織等に対するガバナンスの確保、コンプライアンスの強化等に係わる指導、助言及び支援を行うべきである。

これら13原則の下に、より具体的な原則・規範が定められている。

例えば原則2では、（1）組織の役員及び評議員の構成等における多様性の確保を図ることとして、①外部理事の目標割合（25%以上）及び女性理事の目標割合（40%以上）を設定するとともに、その達成に向けた具体的な方策を講じること、と定められている。

また、（3）役員等の新陳代謝を図る仕組みを設けることとして、①理事の就任時の年齢に制限を設けること。②理事が原則として10年を超えて在任することがないように再任回数の上限を設けることなどが定められている。

これらの規定は、現行の役員構成を考えると本協会はもとより各NFでもハードルが高く、説明会でも質問が相次いだ。

こうした現状を勘案して、この規定の激変緩和措置として、各NFが、理事の再任回数の制限を直ちに実施することが困難な場合、統括団体の1回目の適合性検査（令和2年度～令和5年度、当協会は令和4年度）に限っては、以下の2点について適切な自己説明を行えば足りるとされた。

- ・理事就任時の年齢制限を含めて新陳代謝をはかるための計画を策定し、組織として合意形成を行っていること。
 - ・組織運営及び業務執行上、10年を超えて引き続き在任することが特に必要である理事について、役員候補者選考委員会等で実績等を適切に評価していること。
- また、原則13の下では、（1）加盟規程の整備等により地方組織等との間の権限関係を明確にするとともに、地方組織等の組織運営及び業務執行について適切な指導、助言及び支援を行うこと。（2）地方組織等の運営者に対する情報提供や研修会の実施等に支援を行うこと。と定められている。

地方組織の多くは、法人格を持たず、若干名のボランティアで運営していることも珍しくないなど、その人的・財政的基盤は極めて脆弱なため、都道府県体協等からの助成金に関する不正使用や規程等に基づいた公正な手続きを経ないで構成員の処分が行われるといった問題も生じている。そのため各NFは、地方組織等における不適切な組織運営により、対象スポーツの価値が損なわれる不祥事が発生したり、競技者をはじめとした構成員の権利利益が不当に侵害されたりすることがないよう、地方組織等におけるガバナンスの確保及びコンプライアンスの強化にリーダーシップを発揮し、適切な指導、助言及び支援を行うことが求められている。

本協会の加盟団体のようなスポーツ団体向けのガバナンスコードは、「一般スポーツ団体ガバナンスコード」として発表され、以下の6原則が規定されている。

- 原則1 法令等に基づき適切な団体運営及び事業運営を行うべきである。
- 原則2 組織運営に関する目指すべき基本方針を策定し公表すべきである。
- 原則3 暴力行為の根絶等に向けたコンプライアンス意識の徹底を図るべきである。
- 原則4 公正かつ適切な会計処理をすべきである。
- 原則5 法令に基づく情報開示を適切に行うとともに、組織運営に係る情報を積極的に開示することにより、組織運営の透明性の確保を図るべきである。
- 原則6 高いレベルのガバナンスの確保が求められると自ら判断する場合、ガバナンスコード<NF向け>の個別の規定についても、その遵守状況について自己説明及び公表を行うべきである。

表紙のこぼれ

第59回全日本登山大会延期

令和3年2月20日～22日に予定していた第59回全日本登山大会・千葉大会は、新型コロナウイルス感染拡大の現況を鑑み、延期とさせていただきます。千葉大会は、2023年に開催します。第59回大会は、令和3年9月25日～27日の新潟大会として開催します。

1984年の正月早々、「千人の悪魔の峰(Mountain of Thousand Devils)」という奇怪な異名を持つマモストーン・カンリ(7,526m)から招待状が届いた。東部カラムの中印パ三国の国境地帯に聳える山で、政治的にも禁断の峰だ。異名の謂れは、その昔、中央アジアからカシミールに侵攻した略奪者が近くで雪崩に遭って全滅したというヤルカンドの故事に因んでいる。

その禁断の峰に日印合同隊で登らないか、との招待である。憧憬のサセル・カンリのさらに奥に位置する未踏の玉峰に挑めるのだ、何たる幸運か。

戦後、外国人としては、初めてラダック山脈のカルドン・ラを越えてヌブラ谷に向かった。(写真撮影者 尾形好雄)

編集後記

ストレスが溜まる今日この頃です。リモート会議は場所、時間を選らばず経済的にも便利さがあります。しかし生身の体はこの様な状況にいつまで対応出来るのだろうか。理事会、総会、はじめ軒並みリモートで身体と精神のバランスが安定しない。原因を考察してみると移動手段や移動時間が不要で経済的にも身体的にも無駄が無い、このことがストレスではないのか? ONとOFFの切り替えが機械ではないので上手く出来ない人もいる。まして場所が自宅なら切り替え出来ないまま家族と向き合うのである。いつも平穏でいられますか? 慣れるしかないのか悩ましいコロナよ。(広報担当 水島彰治)

JMSCA 60周年募金協力者ご芳名
 (2020年8月31日現在、敬称略)
 20口：内藤順造、4口：仙石富英
 (総額：1,125口 5,625,000円)
 *

創立60周年記念事業募金のご協力をお願いします。6,000円以上の募金の場合、税額控除証明書を発行いたします。

みずほ銀行 渋谷支店 普通口座 3382501
 口座名：
 (公社) 日本山岳・スポーツライミング協会
 郵便振替 口座記号番号 00110-5-546693
 加入者名：
 (公社) 日本山岳・スポーツライミング協会

トレランJAPAN
 一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒141-0031
 品川区西五反田6-3-23-205
 ☎03-3492-0355 FAX 03-6451-3767

登山月報 第618号

定価 110円(送料別)
 予約年間 1,300円(送料共)
 昭和45年12月12日
 第三種郵便物認可
 (毎月1回15日発行)

発行日 令和2年9月15日
 発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
 Japan Sport Olympic Square 807
 公益社団法人
 日本山岳・スポーツライミング協会

電話 03-5843-1631
 F A X 03-5843-1635

山岳雑誌

岳人

山と人、時代をつなぐ「岳人」

10月号 発売中

【特別編集】秋山 — 全国紅葉名山・近郊の山ベストコース—

★モンベルのウェブサイト 全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格880円(+税)

年間購読がおすすすめです。

購読割引

送料無料

Tシャツセット

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常価格 12冊

~~10,560円~~ (税込)

11,616円(税込)

年間購読 12冊 + Tシャツ

9,680円 (税抜)

10,648円(税込)

2色から選べる!

「岳人」年間購読 + 岳人Tシャツセット

期間限定キャンペーン

岳人の年間購読を【新規お申し込み】または【ご継続】いただくと、「岳人Tシャツ」クーポンをセットでお届け。

キャンペーン期間(お申し込み日)

間もなく終了 ▶▶▶ 2020年10/14まで

(2019年12月から2020年11月までの年間購読開始が対象となります)

※購読開始日に同封されているクーポンを全国のモンベルストア店頭でTシャツと交換させていただきます。ご来店いただけないお客様には発送も可能です。

年間購読のお申し込みはこちらから! ▶▶▶ <https://www.gakujin.jp/>

全国のモンベルストアでも受付中!

お問い合わせ

モンベルポスト

0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からご利用いただけません。

あなたを守る。
あしたを作る。
三井住友海上

損害保険と聞いて、
なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

みつ い すみ とも かい じょう
三井住友海上
じ くう ほ けん
時空保険
たん さ ぶ
探査部
Space-time Insurance
Exploration Department

人類にとっての
損害保険の
必要性を調査。

時空を超える
ゲート。

社員証をかざせば
タイムワープ。

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上



登山者のマナー 山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- 傷害死亡・後遺障害
- 遭難捜索費用
- 救援者費用
- 傷害入院費用
- 傷害通院費用
- 傷害手術費用
- 個人賠償責任

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
<https://sangakukyousai.com>



WEBからもお申込みいただけます